

国語科教育における「思考」「論理」に関わる語彙の指導

—論理的な文章を書くことの学習指導と関連させて—

Vocabulary guidance pertaining to “thinking” and “logic” in Japanese language education :

In association with educational guidance on logical writing

松崎史周

Fumichika MATSUZAKI

Abstract

This report explores the researches on vocabulary guidance pertaining to “thinking” and “logic” in Japanese language education, examining what kind of words and phrases have been selected and what kind of educational guidance has been provided, organizing their achievements and problems, and presenting the direction to develop the vocabulary guidance leading to the growth of logical expressiveness. In the research of Japanese language education, not enough effort has been made to develop the vocabulary necessary to express logical thinking. Almost no investigation has been conducted about the vocabulary pertaining to “thinking” and “logic,” which are to be used by schoolchildren and students in composition. I have examined four relevant publications touching upon the vocabulary guidance pertaining to “thinking” and “logic,” and reached the following conclusion.

(1) We have not been able to appropriately and sufficiently select the words and phrases that will lead to logical writing, while associating them with the educational guidance on “writing.”

(2) We have established no programs to present schoolchildren with the selected words and phrases, matching them with the types of sentences and description processes in composition. Nor have we been able to fully utilize the selected words and phrases in educational guidance on “writing.”

Judging from all these problems, in order to develop the vocabulary guidance that will lead to the development of logical expressiveness, it is necessary, in my understanding, to select the words and phrases pertaining to “thinking” and “logic,” associating them with education of “writing,” and clarify how to utilize them in educational guidance. In addition, taking as an example the study of opinion statements for the higher grades of elementary school, I have selected some expressions related to “thinking” and “logic,” presented how to utilize those words and phrases in educational guidance, and indicated the direction for developing the vocabulary guidance on “writing.”

Keywords : *vocabulary guidance, thinking, logic, logical writing, Japanese language education*

I はじめに

平成29年3月に告示された小・中学校学習指導要領では、国語科の改訂ポイントの一つとして「語彙指導の改善と充実」を挙げている。これまでも国語科では国語の基礎的な能力を育成するものとして語彙指導を重視してきたが、今回の改訂に先立つ中央教育審議会の答申では次のように指摘がなされている²⁾。

小学校低学年の学力差の大きな背景に語彙の量と

質の違いがあるとの指摘を踏まえ、思考を深めたり活性化させたりしていくための語彙を豊かにするなど、語彙量を増やしたり、語彙力を伸ばしたりして、語彙を生活の中で活用できるよう指導の改善・充実を図ることが重要である。(下線筆者)

児童が有する語彙の量と質の違いが学力差の要因になっているとして、語彙量の拡充や語彙力の伸長を求めているが、語彙量の拡充に関しては、多様な語彙の中でも「思考」に関わる語彙の拡充を挙げていることが注目される。

この指摘を受けて、新学習指導要領では各学年で重

点的に指導する語句の項目を挙げるなど指導内容の改善と充実が図られたが、語彙量の拡充については解説編で次のように述べられている¹⁰⁾。

語彙を豊かにするとは、自分の語彙を量と質の両面から充実させることである。具体的には、意味を理解している語句の数を増やすだけでなく、話や文章の中で使いこなせる語句を増やすとともに、語句と語句との関係、語句の構成や変化などへの理解を通して、語句の意味や使い方に対する認識を深め、語彙の質を高めることである。(下線筆者)

理解語彙としての拡充に留まることなく、使用語彙としても拡充させていくことを求めているが、上記の中教審答申と重ね合わせてみると、「思考」に関わる語句を発話や文章で適切に使える使用語彙として拡充させていくことが目指されていると分かる。

新学習指導要領では「思考」に関わる語彙の指導について、小学校第5・6学年で「思考に関わる語句」の量を増やすこと、中学校第2学年で「抽象的な概念の語句」の量を増やすこととしているが、前者については語句の例が挙げられているものの、後者については挙げられていない。教科書教材で提示されない限り、学習指導にあたる教師自身が想定・選定しなくてはならないことになる。

また、文字や語彙、文法など「言葉のきまりと使い方」の学習指導は「話すこと・聞くこと」「書くこと」「読むこと」の学習指導を通して機能的に行うことが基本とされているが、これまでの語彙指導は「読むこと」の学習指導を通して行われることが多く、「思考」に関わる語句であれば、説明文教材の読みの指導の中で語句の意味理解を図るとというのが一般的であった。だが、それだけでは文章で適切に使える語句にはなっていない。「書くこと」の学習指導を通し、文種を踏まえて適切かつ効果的に語句を使用できる技能を育成していく必要があるだろう。

新学習指導要領に基づく語彙指導、とりわけ論理的表現力の育成につながる語彙指導を実践していくには、「思考」「論理」に関わる語彙としてどのような語句を、どのように指導していくのか、その範囲や方法を明らかにする必要がある。そこで、本稿では戦後の国語科教育系書籍を対象として「思考」「論理」に関わる語彙の指導の研究を調査し、どのような語句が学習語彙として選定され、どのような学習指導が提起されてきたのかを確認し、「書くこと」の学習指導と関連づ

けて、その成果と課題を整理していく。そのうえで、論理的表現力の育成につながる語彙指導の開発に向けて、その方向性を提起していくこととする。

II 「思考」「論理」に関わる語彙の指導についての研究

国語科教育研究において思考力・論理力の育成は主要なテーマとされ、これまでも様々な観点から研究が進められるとともに、授業実践も数多くなされてきた。その中でツールミンモデルに基づく「論理的思考力・表現力」育成の理論・実践はその代表格と言えよう¹¹⁾。ツールミンモデルとはイギリスの哲学者ステューヴン＝ツールミンが提唱した議論レイアウトのことで、「データ」「理由づけ」「主張」「裏付け」「限定」「反証」の6つの要素から構成されているが、国語科教育ではこのうち「データ」「理由づけ」「主張」の3要素を取り出し、児童・生徒の論証能力の育成を図ってきた¹²⁾。これら3要素を意識することで、自己の考えや意見を論理的に述べるができるうえに、意見文などの論理的な文章の作成にとどまらず、文学作品の解釈など様々な言語活動にも利用できる。このようなことから「論証」の能力は児童・生徒に習得させたい「論理的思考力」の筆頭に挙げられてきたが、「論証」以外にも児童・生徒に育成すべき論理的思考力は他にも挙げることができる。また、論証の指導も「データ」「理由づけ」「主張」の3要素を完備して表現することにより重きが置かれ、どのような語句を用いて表現するのかについてはほとんど言及がなされていない。

論理的思考力・表現力の育成を掲げた研究は数多いが、論理的思考力・表現力の育成を視野に入れながらも「思考」「論理」に関わる語彙を選定し、学習指導の方法を提起した研究となると数は少なく、おおよそ次の4つの書籍に絞られてくる¹³⁾。

- 1) 児童言語研究会(1962)『国語教育の体系化—言語要素指導—』明治図書
- 2) 浜松市上島小学校(1985)『豊かな読みをめざす語彙の指導』明治図書
- 3) 浜本純逸編(1989)『小学校語彙指導の活性化』明治図書
- 4) 櫻本明美(1995)『説明的表現の授業—考えて書く力を育てる—』明治図書

以下、これら4つの書籍について、「思考」「論理」に関わる語句としてどのような語句が選定されている

のか、学習指導の方法としてどのようなものが提起されているのか見ていくこととする。

1) 児童言語研究会『国語教育の体系化一言語要素指導一』

音声・文字・語彙・文法といった言語要素について理論と指導の両面から解説した研究・実践書であるが、語彙に関しては系統的な指導を目指して教育基本語彙の選定を行っている。国語辞典所収の各語を対象として読解・聴取理解や思考・表現伝達に欠かせない語という観点から1,995語選定し、小学校と中学校に指導段階を分け、それらをA（特に大切な語イ）とB（A語に続くもの）に整理して、「児言研・国語科教育基本語イ」としてまとめている。また、これと併行して、大久保忠利（1961）『コトバの機能と教育・国語教育』で提案された55語の「論理用語基本語」¹⁴⁾を補正して70語の「学習論理語イ」を選定し、「対象についての用語」と「人間の知的活動用語」に分類して、学年配当（小学校低学年・中学年・高学年・中学生）を示す形で整理している。以下に学習論理語イの一覧表を抜粋して挙げる（表1）⁶⁾。

和語による「生活語」と漢語による「論理語イ」とを関連づける形で語彙を選定し、語と語の意味的関連が分かるような形で表に整理している。児童・生徒の

表1 児言研試案 学習論理語イ一覧表（抜粋）

語彙		対象についての用語		人間の知的活動用語		学年
漢語	和語	漢語	和語	漢語	和語	
ま	ま	ま	ま	ま	ま	一
ち	ち	ち	ち	ち	ち	二
い	い	い	い	い	い	三
そ	そ	そ	そ	そ	そ	四
あ	あ	あ	あ	あ	あ	五
な	な	な	な	な	な	六
ま	ま	ま	ま	ま	ま	中
ち	ち	ち	ち	ち	ち	学
い	い	い	い	い	い	校
そ	そ	そ	そ	そ	そ	生
あ	あ	あ	あ	あ	あ	徒
な	な	な	な	な	な	

実態を踏まえて意味理解を図りたい語句を選定しているが、必ずしも「読むこと」「書くこと」の学習指導と関連付けて語句を選定しているわけではない。「書くこと」と関連付けて考えるならば、実際の文章記述に利用できるように単語の形式だけでなく文型の形式でも語句を提示する必要がある。

また、学習指導の方法としては「生活語をとらえて術語に高める」ことが挙げられている⁵⁾。

2で例に挙げた「…だからちょうだい」の文は、理由文として重文の形にくみだてられている。この文をもっと端的に「理由」を示す文として表現するならば「…この理由は…」という形におきかえることができよう。理由を示すのであれば、理由を示すのに一番適した語を使用することが、最も明快に、理由を表現することになると思う。しかし、明快な表現ができるからといって、「だから」から一足とびに「理由」へと飛躍させたのでは、ちょっと無理があるように思えるので、中間に「理由」よりも広くかつ日常親しみのある「わけ」という語で一段階作ったらどうだろう。

このように、「だから」→「わけ」→「理由」という3つのステップを用意して「理由づけ」の語句を指導すれば、「理由」という語のみを指導するより無理なく意味理解を図ることができよう。児童の言語使用の実態を踏まえ機会を捉えて学習指導を行うこと、児童がすでに習得している「生活語」と関連付けて指導することなど学習指導に工夫が見られるが、学習指導の機会はいくまで教師が児童・生徒の言語使用に課題を見出した際に限られており、系統的な学習指導が想定されているわけではない。「書くこと」の学習指導との関連付けも図られておらず、「論理語イ」を選定しているにもかかわらず、それをを用いて論理的な文章を書くといった論理的表現力育成の学習指導も想定されていない。

2) 浜松市上島小学校『豊かな読みをめざす語彙の指導』

豊かな読みを目指してキーワードに基づく読み方指導を提起した研究・実践書である。語句に着目して教科書教材を分析し、そこから「読むこと」「書くこと」の学習指導で着目すべき語句をキーワードとして選定しているが、語句選定の観点は次の5つである³⁾。

- 1 読み取りに大切な語句
- 2 語彙指導として発展的に扱える語句
- 3 使い方に慣れさせる語句

4 論理的な思考を伸ばす語句

5 国語科専門用語

このうち、「論理的な思考を伸ばす語句」については、「説明的な文章を読んだり書いたりするときに必要な言葉」⁹⁾とされており、論理的文章を書くことにつながる語句も選定されているように読める。「論理的な思考を伸ばす語句」としては以下の語句が挙げられている。

- 第1学年：これは（「しっぽのやくめ」）
- 第2学年：なぜ、ほんたいに、このように（「たんぽぽのちえ」）
- 第3学年：かんさつ、仕組み（「ありの行列」）
- 第4学年：まず、わけ、げんいん（「キョウリユウの話」）
- 第5学年：<なし>
- 第6学年：元をただせば、～に限らず（「自然を守る」）

教科書教材に出現した語句の分析に基づくためか、各教材とも上記の分類すべてにわたって語句が選定されているわけではない。特に「論理的な思考を伸ばす語句」は選定されている語句が少なく、選定されていない教材も見られる。選定された語句も論理的文章を書く際に必要な言葉をカバーできているとはいえない。論理的表现を支える「思考」「論理」に関わる語句を、教科書所収の説明文教材のみから過不足なく選

定することの難しさを示す結果となっている⁴⁾。

3) 浜本純逸編『小学校語彙指導の活性化』

国語科教育においては児童・生徒に習得させるべき語彙のモデルを持って学習指導を検討すべきとの考えから、教育基本語彙表を作成し、実践例を挙げながら学習指導の方法を提起した研究・実践書である。小・中学校教科書教材の語彙分析を行って、文学教材から「感情語彙」、説明文教材から「論理語彙」を選定し、「分類語彙表」に基づく意味分類と学年配当を行って、1,736語の「教育基本語彙」としてまとめている。以下に語彙表を抜粋して挙げる（表2）⁴⁾。

「分類語彙表」に基づく意味分類ごとに、児童・生徒に習得させたい語句が学年別に示されており、「読むこと」「書くこと」の学習指導を行ううえで指導すべき「重要語句」を選定するのに役立つ。ただ、同じ分類番号の語句を小学校低学年から順に中学まで辿っても、語句相互に意味的関連性が感じられないものも見受けられる。児童言語研究会のように、学年進行に応じて生活語から抽象語へと辿れるように必ずしもなっているわけではない。

	小・低	小・中	小・高	中学
43,07	わけ、ため	理由、原因、説明	資料、統計	データ、要因、前提

表2 教育基本語彙表・試案（抜粋）

4 認識 3 認識方法

	小・低	小・中	小・高	中学	
01	問題、答え	理解、解決、解答	問い	認識	
02			誤解	錯覚、錯誤	
03			納得、把握	会得、了解	
04			方法、手段	手順、要領、方法	
05			比較、分解、選択	分析、総合、識別、大別	
06			手引き、参考	参照、備考	
07	わけ、ため	理由、原因、説明	場合、例、見本、模型	データ、要因、前提	
08			証拠	論拠、根拠、論証、実証、裏付け	
09			観察、実験、調査	証明	観測、測定、点検、吟味
10			発見、発見	検討	探求、充明、解明
11	夢	予想	研究、追求	想定	
12			想像、イメージ、連想、構想	類推、推定、推測	
13			推理、推量、予想	虚構、架空、幻想	
11	はず	計画、予定、案	空想	仮説	
12			仮定	肯定、否定、評価	
13			判断、決定	結論、断定、強調、誇張、批判、批評	
13	図・表	図形、図表、グラフ	映像	映像	
			図解	図式	

また、意味的に関連していると思われる語が異なる項目に分類されている例も見受けられる。本表は児童・生徒に提示するものではなく、あくまで教師が学習指導を考える際に参考にするものであるが、語句の関連性が見えにくく、思考様式を反映させた分類にもなっていない。

43,05c	比較, 分類	43,06c	対照, 対比
72,02a	くらべる		

さらに、「書くこと」の学習指導との関連を考慮して語句が選定されているわけでもなく、論理的な文章を書く学習指導も提起されていない。各学年でどのような語句を指導すればいいのかの指標にはなるが、単語形式のみで文型形式での語句提示がなく、作文記述にそのまま利用しにくいなど、「書くこと」の学習指導、とりわけ論理的な文章を書く学習指導との関連でみると課題が多いと言えよう。

4) 櫻本明美『説明的表現の授業－考えて書く力を育てる－』

児童の説明的表現を確か豊かなものにすべく、論理的思考力を活性化させる指導の内容と方法を提起した研究・実践書である。先行研究に学んで論理的思考力の全体構造を提起するとともに、論理的思考力を「知覚する力」「関係づける力」「意義づける力」に分類している。このうち「関係づける力」については「比較」「順序」「類別」「理由づけ」「定義づけ」「推理」の6つの要素に分類し、それらを示す表現を国語教科書（平成4年版）の説明的文章教材から抽出して、学年別に系統立て整理している。以下に「比較」を示す表現の例を挙げる（表3）¹⁹⁾。

表3 説明的表現の例（比較）

低学年では	<ul style="list-style-type: none"> ・くらべてみましょう。 ・どちらが〇〇でしょう。 ・どちらも〇〇です。 ・～は、〇〇です。～も〇〇 ・～は、とくに ・よくにた ・～は、〇〇です。でも、～ ・～のように ・～よりずっと ・～とちがって、〇〇は
中学年では (低に加えて)	<ul style="list-style-type: none"> ・AとBのちがいは、 ・いちばん～は、 ・～よりもはるかに ・～と同じくらい ・～しかできないことは、

高学年では (低・中に加えて)	<ul style="list-style-type: none"> ・AとBをくらべると、 ・いったいどのようにちがうのでしょうか。 ・～とそっくりです。 ・～とよく似ています。 ・二つの比較から
--------------------	--

「書くこと」の学習指導で養うべき論理的思考力（関係づける力）の要素を提示し、その表現例を系統的に挙げるなど、先行研究には見られない取り組みとなっている。表現例も主に文型形式で示され、実際の作文記述に取り入れやすい。ただ、個々の表現例を詳細に見ていくと、学年配当が適切か、より適切な表現が他にないかなど検討を要する点も見られる。また、表現例の提示も小学校のみで、中学・高校の例が示されていない。とはいえ、「書くこと」の学習指導につながる語彙指導を考えるうえで大変参考になる取り組みと言えよう。

学習指導の方法としては、説明文教材で学んだ思考様式を用いて文章を書くという学習が挙げられている¹⁴⁾。小学校第1学年の「くらべて、みつけたよ」という単元は「比較」に着目した授業実践であるが、「やさしく比べ」「たねのふしぎ」などの説明文教材を読むことで「比較」の思考様式を学び、そのうえで、互いに似ているものを2つ選び出し、それを比べて違いを見つけ、文章にまとめるという流れで学習が組まれている。なお、学習の目標として次の3点が挙げられている。

- ・比較して書くことをとおして、身のまわりのできごとを正確にとらえる力を伸ばす。
- ・主語と述語の関係に注意して文を書くことができる。
- ・みつけたことを文章に書いたり、書いたものを読み合ったりすることの面白さを感じ取ることができる。

「読むこと」の学習を通して学んだ思考様式を利用して「書くこと」の学習を組織している点、言語形式を意識しながら文章を書かせている点など学習指導の焦点が絞られた授業実践となっている。ただ、「比較」を示す表現の例を作文記述の過程の中でどのように活用したのかについては明確に示されておらず、論理的な文章を書く学習指導における語彙指導の具体的な方法までは示されていない。

以上、「思考」「論理」に関わる語彙の指導を取り上げた4つの書籍を概観してきたが、ここまでの分析をまとめると次のようになる。

- (1) 「思考」「論理」に関わる語彙は教育基本語彙表の作成や読解指導のキーワード抽出の一環で選定されてきたが、櫻本(1995)を除いて、「書くこと」の学習指導との関連が図られず、論理的な文章を書くことにつながる語句が適切かつ十分に選出されてこなかった。
- (2) 選定した語句を作文の文種や記述過程に合わせて児童に提示するなどの手立てがなされておらず、選定した語句を「書くこと」の学習指導に十分活かしていない。また、「思考」「論理」に関わる語句として選定した語句を、論理的な文章を書く活動の中に明確に位置付けた実践はなかった。

III 「思考」「論理」に関わる語彙の指導の方向性

論理的表現力育成につながる語彙指導を開発するにはどのようなことが必要となってくるだろうか。本稿では、「書くこと」の学習指導と関連付けながら「思考」「論理」に関わる語句を選定し、学習指導の中で選定した語句をどのように活用するのかを明らかにしていくことが必要と考える。

1) 国語科で育成する論理的思考力

先述のとおり国語科教育において論理的思考力育成の指導に関する研究は数多く、論理的思考の要素も様々に提起されてきた。幸坂(2014)は論理的思考力育成に関する先行研究を調査し、論理関係や論理的思考活動の要素(単一要素)を次の4種にまとめている⁸⁾。

- ・対比系…比べる・対比・比較・「対」、差異－共通
- ・順序系…順序・順番、列挙・並列
- ・因果系…因果、論証・理由・理由づけ・事由・前提－帰結・根拠－意見
- ・具体－抽象系…具体－抽象・一般化・帰納－演繹・自分の経験や知識とつなげる

諸家によって論理的思考の要素の設定は異なるものの、上記4種及びそこに含まれる要素は櫻本(1995)や小田(1996)など主要な論考に共通して見られるとともに、学習指導要領の記述にも見られるものである。

新学習指導要領で論理的思考に関わる内容は〔知識及び技能〕(2)「情報の扱い方」に示されているが、小学校第1・2学年では「共通」「相違」「順序」、第3・4学年では「理由」「全体と中心」「比較と分類」、第5・6学年では「原因と結果」といった論理的思考の要素が挙げられ、中学校では「意見と根拠」「具体と抽象」が挙げられている。このうち「順序」「理由」などは(思考力、判断力、表現力等)「書くこと」領域にも挙げられており、知識・技能として習得した論理的思考力を文章作成に活用することが求められていると分かる。

新学習指導要領について、阿部(2017)は論理的思考力に関する内容に広がりが見られると評価しながらも、「上位と下位(概念)」「前提と帰結」「推理」「類比」「対比」「対応」「過程」「消去(法)」「典型」「特殊」などの要素が示されず十分ではないと指摘している⁹⁾。だが、どのような要素を設定すべきかについては、国語科の目標、とりわけ論理的思考力・読解力・表現力育成の目標を視野に入れて検討すべきであり、すぐに結論が得られるものでもない。そこで、さしあたっては新学習指導要領に挙げられた各要素について、当該学年の学習指導と関連させながらどのような語彙指導を行うか検討していくこととし、本稿では小学校高学年の意見文教材を取り上げ、「思考」「論理」に関わる語句としてどのようなものを選定し、選定した語句をどのような形で学習指導に活用していくのか検討していくこととする。

2) 小学校高学年「書くこと」教材に見る「思考」「論理」に関わる語句

小学校高学年では各社教科書とも意見文を書く教材を置いている。平成28年度版であれば、光村図書(6年)「未来がよりよくあるために」、東京書籍(6年)「資料を生かして呼びかけよう」、教育出版(6下)「意見文を書こう」などが挙げられるが¹⁰⁾、ここでは教育出版の教材を例にして見ていく。

教育出版(6下)「意見文を書こう」は、児童自身の体験や経験から生まれた意見を、読み手に伝わるような説得力のある文章にまとめるという教材で、意見の根拠を明確にし、文章構成を考えて書くことを学習目標としている。学習活動には次のような過程が立てられ、[課題設定－取材－構成－記述－交流]といった「書くこと」の指導事項に沿って学習が進められるようになっている。

- ① 課題を見つけて、意見の中心を明確にする

- ② 意見に説得力をもたせるための取材をする
- ③ 効果的な構成を考える
- ④ 読み手に伝わるように意見文を書く
- ⑤ 意見文を読み合い、感想を述べ合う

文章の構成は「序論－本論－結論」の三段構成とし、序論で取り上げる課題と自分の意見・立場を明らかにし、本論で自分の意見とその根拠、具体例を示し、結論で自分の主張を明らかにするとしている。また、引用の方法について説明を行い、取材で得た情報を文章に引用して、自分の意見に説得力を持たせていくように促している。

以上を踏まえて、意見文の例として以下のような模範文が挙げられている(図)。なお、欄外には書き方の特徴や表現の効果の注記が加えられている⁹⁾。

自己の経験や取材で得た情報を用いながら理由や根拠を示して自分の意見を明確に示しており、説得力の

ある文章になっている。また、本論では予想される反対意見を挙げ、それに対する反論も示して、説得力が増すようにもなされている。「意見と根拠」「理由(因果)」「自分の経験とつなげる」といった思考様式が認められるが、「思考」「論理」に関わる語句として次のような表現が用いられている。

主張：～しなければなりません/～と思います/
～のではないでしょう

原因(理由)：～の理由で

これらに加えて、「譲歩」や「引用」、「語りかけ」の表現も用いられている¹⁰⁾。

譲歩：確かに～しかし、…

引用：～によると、…というのです/～によると、
とのことでした

語りかけ：みなさんは、～ますか/なぜ～のしょうか

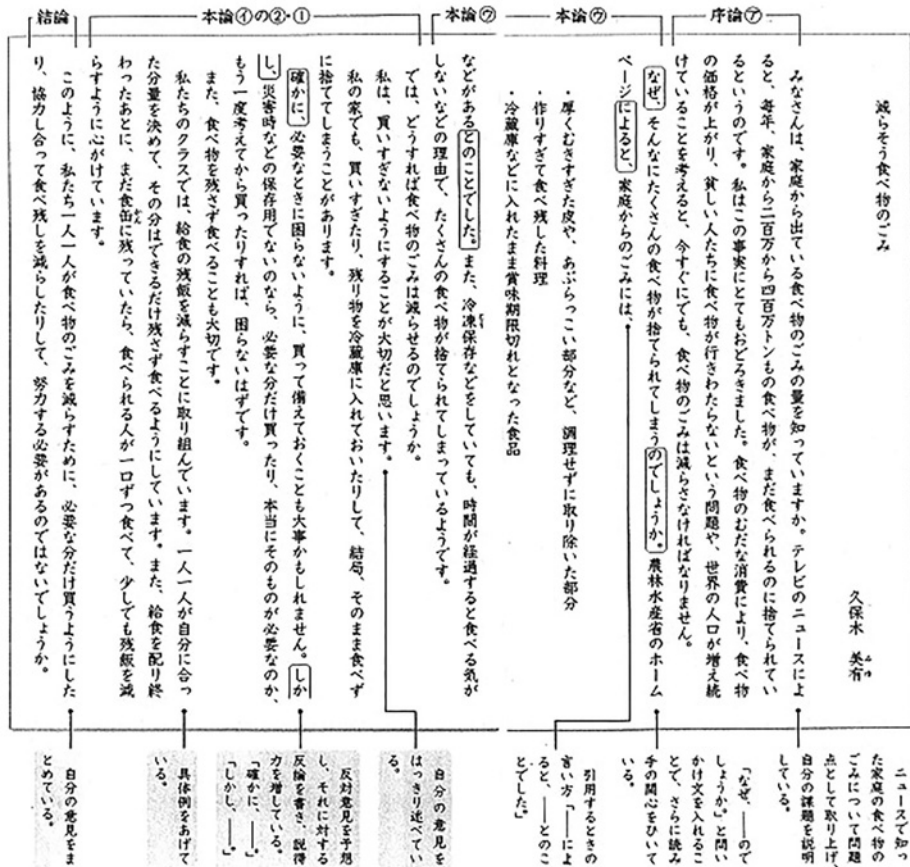


図 意見文の模範文と注記

上記のような表現が適切に用いられることで説得性のある文章になっているが、こうした表現を意見文に反映される思考様式ごとに例示し、児童が自身の表現意図に基づいて選択できるように学習指導を組織していくことが児童の論理的表現力を育成する上で重要となってくる。

大熊（1994）は、児童の作文嫌いの一因として、作文執筆過程における構成段階と記述段階の断層の大きさを挙げている。取材も十分でき、構成表もできたが、いざ書かせてみると、構成表の要約的な表現を転記しただけの作文になったり、基本的な文法や語彙の不足のために文章自体が書けなかったりすることがある¹²⁾。作文に困難を抱える児童ほど記述に課題が大きく、教科書教材の解説や教師による支援が必要となってくる。だが、小学校国語教科書（光村図書）「書くこと」教材を調査した清道（2013）によると、平成17年度版では、書くプロセス全体よりもプランニングの一部（材料集め）を重点的に解説した教材が多く、書くプロセスやスキルに関する具体的観点や例の扱いが少なかったという⁷⁾。モデル作文を掲載している教材は多いが、文章構成や表現例に関する脚注や書き込み解説が少なく、教科書教材が児童にとって記述の手がかりとなり得ていない状況がある。

こうした状況を改善し、児童の記述を支援するためにも、意見文に反映される思考様式に合わせて「思考」「論理」に関する語彙を表現例として挙げることが重要となる。例えば、上記の意見文教材に関連させて、「主張」「理由（因果）」を表す語句を挙げるとすれば、次のようなものが考えられる⁹⁾。

<主張を表す語句>

- ・～だろう　・～と思う/思われる
- ・～と考える/考えられる
- ・～のではないか/～のではないだろうか
- ・～べきだ
- ・～しなければならない/～てはならない
- ・～ことが望まれる

<原因・理由（づけ）を表す語句>

- ・～ため　・～から　・～ので　・～によって
- ・～の理由で
- ・なぜなら/なぜかという/と/というのは/その理由は～からだ
- ・だから/そのため/それで
- ・～のため/おかげ/せいだ

このように、論理的思考の要素（様式）ごとに表現

例を挙げ、そのうえで教科書教材文や児童作文での出現状況を見ながら、それぞれの語句に学年段階（小学校低・中・高学年・中学校）の配当を付けていけば、教師用の語句リストが作成できるだろう。「思考」「論理」に関する語句が、論理的思考の要素（様式）ごとに、そして学年段階別に示されれば、各学年段階でどのような論理的文章を書かせればよいのか、教師も指導のイメージを持つことができる。また、実際の学習指導では、担当クラスの児童の作文使用語彙や使用教科書の作文教材に合わせて使用させたい語句を選定し、児童が参照しやすい形にリスト化して、作文記述時に参照させることが考えられる。このような手立てが「書くこと」の学習指導で行われれば、児童が「思考」「論理」に関わる語句を使用語彙として習得することにつながり、論理的思考力・表現力を育成していくことができよう。論理的表現力の育成につながる語彙指導の開発に向けて、こうした取り組みが必要なものと考ええる。

指導の開発に向けては、学年・文種ごとに「書くこと」教材を分析して、「書くこと」の学習指導で養う論理的思考の要素を明らかにし、習得させたい「思考」「論理」に関わる表現（語彙・文型）を選定して、学年配当を付けていかななくてはならない。今後は、各社教科書の「書くこと」教材や児童・生徒の作文を分析して、小学校・中学校・高校の学年段階ごとに「書くこと」の学習指導で養う論理的思考の要素と「思考」「論理」に関わる表現（語彙・文型）を明らかにし、「書くこと」の学習における語彙指導の系統を示していきたいと考えている。

付記

本研究は、科学研究費（基盤研究(B)「作文を支援する語彙・文法的事項に関する研究」研究代表者：矢澤真人（筑波大学）課題番号26285196）の助成を受けている。

注

- (1) 国語科教育との関連でいち早くトゥールミンモデルに言及したものに、井上(1977)がある。また、トゥールミンモデルに基づく論理的思考力・表現力育成については、鶴田・河野編著(2014)が詳しい。
- (2) 幸坂(2010)は、国語科教育において「データ」「理由づけ」「主張」の3要素がトゥールミンモデルの中心的要素として受容されている現状に疑義を呈している。
- (3) 書籍化されていない論考であれば、岸田薫(2006)「『考

える力」を高めるための語彙指導の研究～小学校国語教科書における『思考を助ける語彙～』全国大学国語教育学会『国語科教育研究』（第110回岩手大会研究発表要旨集）pp.191-194も挙げられる。また、「思考」「論理」に関わる語彙は示していないが、論理的思考の要素（様式）を具体的に挙げた最近の書籍に、野中太一（2016）『生きてはたらく論理的思考力ー小学校国語科における「資質・能力」から考えるー』東洋館出版社がある。本稿は、「思考」「論理」に関わる語彙を具体的に示し、その語句を活用した学習指導を提起した書籍を調査の対象としているため、これらは考察の対象としてない。

(4) 書籍2の監修者・甲斐睦朗は本書を端緒として語句に着目した読み方指導の開発を進め、1991年には小学校・中学校に分けて文学教材・説明文教材・詩教材に関する実践書を計10冊編集・発行している（甲斐睦朗編（1991）『語句に着目した読み方指導』明治図書）。そこでは、「読むこと」の学習指導のキーワードとなる語句を次の4点で選定している。

- A 要旨にかかわる語句＝内容を読み深めるのに必要な語句
- B 論理の展開にかかわる語句＝論理的な思考力を伸ばすのに必要な語句
- C 書き手の判断にかかわる語句
- D 表現に活かす語句

ここにも「論理的な思考力を伸ばすのに必要な語句」が挙げられているが、あくまで教材の読み取りを深めるという観点から選定されているもので、「書くこと」の学習指導と関連付けて選定されたものではない。

- (5) 光村図書『国語六 創造』pp.92-99, 東京書籍『新編新しい国語六』pp.90-95, 教育出版『ひろがる言葉 小学国語6下』pp.52-57.
- (6) 児童が作文に使用する「語りかけ」表現については、松崎（2016）を参照のこと。
- (7) 浜田・平尾・由井（1997）や湯本・木戸（2014）を参考にした。「思考」「論理」に関わる語句の収集には、これらのようなアカデミック・ライティング研究が参考になる。なお、「～と思う」と「～と考える」の違い、「～と思われる」「～考えられる」といったラレル形の機能、「～のではない（だろう）か」の意味合いなど、「主張」を表す語句に限っても意味・機能について注記が必要になってくる。こうした内容をどの学年段階でどこまで指導するのかについては、稿を改めて論じることとする。

引用文献

- 1) 阿部昇（2017）「『言語能力』としての『読解力』の重視ーその特徴と課題」『教育科学国語教育』810号, 明治図書, pp.28-29
- 2) 中央教育審議会「幼稚園, 小学校, 中学校委, 高等学校及び特別支援学校の学習指導要領等の改善及び必要な方策等について（答申）」（平成28年12月）p.86
- 3) 浜松市上島小学校（1985）p.13

- 4) 浜本編（1989）pp.203-244, 抜粋部分は p.208
- 5) 児童言語研究会（1962）p.117
- 6) 同上 p.120
- 7) 清道亜都子（2013）『書くことの教育における理論知と実践知の統合』渓水社, pp.54-73
- 8) 幸坂（2014）pp.28-30
- 9) 教育出版『ひろがる言葉 小学国語6下』pp.55-56
- 10) 文部科学省「小学校学習指導要領解説国語編」（平成29年6月）p.8
- 11) 大久保忠利（1961）『コトバの機能と教育・国語教育』明治図書, p.68
- 12) 大熊徹（1994）『文章論的作文指導ー論理的思考力・認識力の育成ー』明治図書, pp.194-212
- 13) 櫻本（1995）p.27
- 14) 同上 pp.122-178

参考文献

- 井上尚美（1977）『言語論理教育への道ー国語科における思考ー』文化開発社
- 甲斐睦朗（2012）「語句に着目した読み方指導ーこれまでの取り組みと今後の課題ー」全国大学国語教育学会『国語科教育研究』（第122回筑波大会研究発表要旨集）pp.51-54
- 川端端子（2013）「大学生のレポートに出現する『思う』と『考える』の機能についてー伝達の側面から見た問題点ー」『愛知工業大学研究報告』48号, pp.77-84
- 幸坂健太郎（2010）「国語科教育におけるトゥールミン・モデルの受容についての批判的検討」『論叢 国語教育学』復刊1号, pp.54-66
- 幸坂健太郎（2014）『学習者の思考過程に着目した国語科論理的思考力の育成の研究』広島大学教育学研究科学学位論文（<http://ir.lib.hiroshima-u.ac.jp/ja/00035749>にて参照）
- 松崎史周（2016）「児童作文における表現類型のモダリティの分析ー語りかけ性」を有する表現に着目してー」博報財団第11回児童教育実践についての研究助成出版物『現場との協働による児童・生徒の作文能力の経年変化に関する研究』pp.38-43
- 日本国語教育学会監修（2017）『シリーズ国語授業づくり 語彙ー言葉を広げるー』東洋館出版社
- 小田迪夫（1996）「情報の読みと論理の読み」田近洵一編『国語科の新視点② 情報と論理を追求する説明文の授業』国土社, pp.185-195
- 塚田康彦・池上幸治（1998）『語彙指導の革新と実践的課題』明治図書
- 鶴田清司・河野順子編著（2014）『論理的思考力・表現力を育てる言語活動のデザイン 小学校編・中学校編』明治図書
- 浜田麻里・平尾得子・由井紀久子（1997）『大学生と留学生のための論文ワークブック』くろしお出版
- 湯本かほり・木戸光子（2014）「大学生のレポートにおける原因・理由を表す文型についてー作文教育への応用を目

指してー」『筑波大学留学生センター日本語教育論集』29号, pp.43-57

(平成29年9月13日受付)
(平成29年12月13日受理)